

## 『羊の歌』『青春』を読む（後半）

立命館大学大学院文学研究科 福井優

### 第 5 段落 「壮行会」に集まった青年たち

その頃埼玉県川口市に、中村の親戚の一人が住んでいた。鉄工所を経営していて、ひとり息子の出征の「壮行会」に、同年輩の青年たちを自宅に招いたことがある。私は中村に誘われて、川口まで出むいた。軍需工業の下請で、鋳物の町は湧きたち、溶鋳炉の火は、燈火管制の夜の暗い空を川口のあたりだけ赤々と焦っていた。もはや東京で手に入れ難くなっていた酒は、ありあまるほどあり、集った青年たちは、酔っぱらったり、飲みすぎて吐いたりしていた。誰もが召集を間近に控えていて、しかも敗戦のちかいことを感じていたのだろう。「ぼくは生きのこりますよ」と足もとの不確かな青白い顔の青年が、私に話しかけてきたが、私はその青年を知らなかった。「兵隊には行きますがね、どんなことをしても、ぼくは生きのこりますよ、死んだってしょうがないでしょう、何のためですか、え、何のためですか、死んでしまえば、何もかもおしまいなんだ、そう簡単に死んでたまるものか……」。また別の一人は微笑しながら他人事のように呟いていた、「いつ終ると思いますか。ぼくはまだ六ヶ月大学にいられるのです。その間には終わらないでしょうね。その間にしたいことをしておきたいと思うけれど……六ヶ月といえれば長いようで、経ってしまえば短いでしょうね」。私自身の召集令状は、明日来るかもしれなかったが、また遂に来ないのかもしれない。とにかく出征の日の決った青年たちのなかに混って、彼らが呻くのを聞いているほど堪え難いことはなかった。鉄工所の主人は、息子の出征にも、いくさの話にも、一切触れなかった。その代りに謡曲の話をしていて、高等学校の同級生であった安倍能成、野上豊一郎氏等と共に、水道橋の能楽堂で、各流の名人を招いて演能の会をしているから、一度見に来たまえ、といった。(194～195 頁、改 220～221 頁)

#### (1) 「軍需工業の下請で、鋳物の町は湧きた」っていた

川口市は、埼玉県南端部の市で、荒川を隔てて東京都北区と隣接する。近世は日光御成街道の宿場町として栄え、この頃より始まっていた鋳物業が、その後の町の発展を支える。満洲事変以降、軍需関連産業の色が濃厚になり、1942 年には単独市で鋳物生産量の日本一を達成<sup>1</sup>。浦山桐郎監督、吉永小百合主演の『キューポラのある街』（日活、1962 年）の舞台

#### (2) 「壮行会」に集まっていた青年たちは、「誰もが召集を間近に控えていて、しかも敗戦のちかいことを感じていた」

- ・二人の青年からそれぞれ「ぼくは生きのこりますよ」、「いつ終ると思いますか」と、声を掛けられる（≡例えば、加藤と同世代の政治学者、神島二郎は、1943 年に入営するのだが、その直前の思いを次のように振り返っている。「はやくも徴兵猶予がきれ、徴兵検査そして

<sup>1</sup> 川口鋳物工業協同組合「鋳物の歴史」[https://www.kawaguchi-imonon.jp/?page\\_id=7](https://www.kawaguchi-imonon.jp/?page_id=7) (2022 年 12 月 16 日閲覧)。

戦争が目のまえに迫ってきた。私は人しれず煩悶した。——戦争へ行けば、すべてが終りだ！／私は、一所懸命に自分の気持を整理し、これに決着をつけようとしてあがいた。そして私なりに私のゆくべき道を見きわめようとした」<sup>2)</sup>

→召集令状が「明日来るかもしれない」い加藤にとっても、「彼らが呻くのを聞いているほど堪え難いことはなかった」

- ・加藤「FEVRIER le 6 lundi」『JOURNAL INTIME 1950 1951』1950 年 2 月 6 日付

「燈火管制下の闇夜に赤く映える溶鉱ろの火。好景気にのった中村氏、一中企業主。その息子は宮沢賢治にこってみた。良心的学生のそれが唯一の逃場所であった。中村君召集の歓送会。▲ち▲にあらはれた好況とあつまった青年の話にあらはれた批判的の空気。——今溶鉱ろのやぐらを見ると火は消えてゐる。去年の焔いまいづこ？」<sup>3)</sup>

- (3) 鉄工所の主人は、「高等学校の同級生であった安倍能成、野上豊一郎氏等と共に、水道橋の能楽堂で、各流の名人を招いて演能の会を」催していた

- ・哲学者の安倍能成（1883～1966）は大正教養主義を代表する自由主義的知識人、戦後は文部大臣・学習院院長などを歴任し教育者としても知られる。野上豊一郎（1883～1950）は英文学者・能楽研究家で、妻は小説家の野上弥生子、歿後に野上記念法政大学能楽研究所が設立される。二人は共に漱石門下で、第一高等学校に安倍は 1902～06 年、野上は 1902～05 年まで在学していた。1942～44 年にかけて創元社から、野上編『能楽全書』全 6 巻（安倍の論文も収録）が刊行されている
- ・当該期の水道橋の能楽堂には、他にも志賀直哉や正宗白鳥、堀辰雄といった「時代と旧制度とからの亡命者の群」が集っていた、と加藤は述べている<sup>4)</sup>

## 第 6 段落 能、または「芝居」の発見

私はいくさのはじまった日に、文楽を見た後、しばらく劇場へ通う習慣を廃していたが、川口の鉄工所の主人にすすめられてから、ときどき水道橋の能楽堂へ出かけるようになった。燈火管制の黒い幕を窓におろした能楽堂のなかには、別の世界があった。鼓が鳴り、引き裂くように鋭い笛が響きわたると、私は橋掛りの果に、遠い世界からの人物があらわれるのを待った。再び鼓が鳴り、笛が響く。ひきのばされた期待の末に、幕があがったかと思うと——いや、気がついたときには、幕がすでに降り、その不思議な人物は、もはや舞台に登場するのではなく、橋掛りの松の側に、忽然と、降って湧いたように出現する。そして梅若万三郎の、あのさびて微妙にふるえる実に美しい声が、謡いだす。その声は——何を言っているのか文句を聞きとり難かったけれ

<sup>2)</sup> 神島二郎「あとがき」『近代日本の精神構造』岩波書店、1961 年、349 頁。

<sup>3)</sup> 「立命館大学図書館／加藤周一文庫デジタルアーカイブ」[https://trc-adeac.trc.co.jp/Html/ImageView/2671055100/2671055100200020/note\\_n11/?p=4](https://trc-adeac.trc.co.jp/Html/ImageView/2671055100/2671055100200020/note_n11/?p=4)。

<sup>4)</sup> 加藤周一「能と近代劇の可能性」『加藤周一著作集 7 近代日本の文明史的的位置』平凡社、1979 年、初出 1947 年、79 頁。

ども、忽ち私を、召集令状も、食糧配給券も、国民服もない別のもう一つの世界のなかへひきこんだ。そこには武士道も、「葉隠」も、三味線や道行さえもなく、その代りに、或は人を殺し、或は人を愛し、たったひとり地獄で苦しむ男や女がいるばかりであった。地獄は社会の問題ではないから、シテはひとりで足りる。憎愛の限りは個性の問題ではないから、シテは面を著けているだろう。あのおどろくべき能役者たちは、ただ小手をかざすことによって、忽ち舞台を波うちよせる須磨の浦の白砂に変じ、白足袋を一步踏み出すことによって、忽ち薄の穂の秋風になびく深草の里を現じることができた。磨かれた床と正面の松一本のほかに、どういふ舞台装置も必要でなかったはずだろう。私はいくさの間に、水道橋の能楽堂で、「能」を発見したのではなく、「芝居」という言葉の究極の意味を発見したのだ。それは必ずしも世阿弥の世界ということだけではなかった。役者の肉声が一体どれほど美しくあり得るかということ。その小さな所作の一つが、どれほど多くを語り得るかということ。また劇場のなかでの時間が、どれほどの期待をはらみ、どれほど張りつめた、どれほど濃密なものであり得るかということ——そもそも必要にして十分な表現が、一体芸術の世界でどういふものであり得るかということ、私はそのとき、そこで、見たのである。むろんそれは偶然にちがいがなかったが、そういう偶然を別にしては、私が日本人であるということの意味もない。どこで生れて育ったか、つまり、どこから始めたかが、一人の男の国籍をきめる。どこに行き着くかが、ではない。現にその後、私は、ほとんど世界中の劇場で、一流の芝居を見るようになったが、それは、私がまず梅若万三郎の謡うのを聞き、金剛巖の舞うのを見ていたからである。決してその逆ではないと思う。(195～197 頁、改 221～223 頁)

(1) 戦時下の伝統芸能について

- ・戦争末期に水道橋の能楽堂に通うようになった加藤にとって、「能楽堂のなかには、別の世界があり、それは「召集令状も、食糧配給券も、国民服もない別のもう一つの世界」だった→「この陰鬱な〔軍人の指揮する〕仮装舞踏会を眺めながら、時代性の彼方に藝術の世界を求めざるを得ない「不幸な少数者」は、能楽堂に集る。梅若万三郎の静かな声は、怒号する人々の耳には聞えず、東京爆撃の嵐が沈黙を強いるまで、帝国主義官僚の眼を逃れた小さな舞台に、永遠の人間性をうたいつづけた」<sup>5</sup>
- ・戦時下の文楽や能といった伝統芸能は、「一部の禁止される演目を除けば、むしろ日本主義イデオロギーによって、伝統の姿がそのままの形で保護される結果も生み出すのである。そしてその保護された伝統文化の世界が、しばしば軍国主義や日本主義の圧迫から人々の逃避する場になることすらあるのであった」
- ・例えば、劇評家の武智鉄二は「1944 年 3 月の高級享楽停止措置以降、公演の方途を失った能の観世流・金春流の名人たちを自らの庇護のもとにおき、私財をなげうって、〔……〕断弦会を組織し、能の公演をおこなっている」<sup>6</sup>

<sup>5</sup> 同前、79 頁。

<sup>6</sup> 赤澤史朗「第八章 戦中・戦後のイデオロギーと文化」『戦中・戦後文化論——転換期日本の文化統合』

(2)「私はいくさの間に、水道橋の能楽堂で、「能」を発見したのではなく、「芝居」という言葉の究極の意味を発見した」

- ・能の世界は「武士道も、「葉隠」も、三味線や道行さえもなく、その代りに、或は人を殺し、或は人を愛し、たったひとり地獄で苦しむ男や女がいるばかりであった」。そして「磨かれた床と正面の松一本」という舞台装置のみで、「ただ小手をかざすことによって、忽ち舞台を波うちよせる須磨の浦の白砂に変じ、白足袋を一步踏み出すことによって、忽ち薄の穂の秋風になびく深草の里を現じることができ」る名優たち——観世流シテ方の梅若万三郎（1868～1946）の謡や、シテ方金剛流宗家の金剛巖（1886～1951）の舞——を見て、加藤は「芝居」という言葉の究極の意味を発見した」
- ・「いくさの間に」能を熱心に見たことと、「芝居」の本質を発見したこととの関連性  
「死が迫って来ると演劇の中の中心的な部分と二次的な部分との違いが見えてくる。だから、死との関係で本当に人間の条件の永遠な部分だけが舞台の上でも訴えてくる。／能の曲は、全部とは言わないけれども、たくさんの飾りとか贅肉を切り落として本質的なものだけで勝負しているものが多い。感傷的な部分は、みんな切られていて、生と死の問題がいきなり出てくる。」「戦争中、いつ死ぬかわからないということになりますと、一人の人間の生死という面が強く迫ってくる。社会的な関係はもうわかっていて、それでいい。どうせ戦争は負けるのだから、私の主要な問題はどんどん生死の問題に集中していく。そうすると能だけが、いちばん訴える芝居になるのです。」<sup>7</sup>
- ・これまでの戦争末期の能を通じた「芝居」の発見という主題は、さらに「どこで生れて育ったか、つまり、どこから始めたかが、一人の男の国籍をきめる」という主題に転じ、加藤自身の起点があくまでも日本文化であり、そこから出発したことが述べられる

### 第 7 段落 戦争に行った友人①

私の友人は一人また一人と去り、誰もいくさが終るまで帰ってこなかった。しかしただひとりの例外があった。彼だけは召集されて中国へ行き、病を得て内地の病院に送還されると、まもなく除隊になった。召集のまえには、姉と浦和の家に住んでいて、本郷の大学へ通い、哲学を修めて、ひそかに詩を書いていた。夏には信州へあらわれ、夕方中仙道を着流しで杖をつきながら歩いていた姿が、遠くからは、老人の散歩のようにみえた。もの静かな声で、言葉少く語り、しかし文章には厳しく、私の作文などは一笑に附し、「君たちの書くものは読むに堪えないね」というていた。私立大学で民法を教えていた姉は、才気煥発で、よく喋り、よく笑い、にぎやかで、開放的で、議論では太刀うちができないほど鋭かった。姉弟は、二人とも、軍国主義を呪い、日本帝国が英米とはじめたいいくさには、盲目的な軍国主義者がみずから墓穴を掘りつつあるとい

法律文化社、2020 年、267～268 頁。

<sup>7</sup> 加藤周一『私にとっての 20 世紀一付 最後のメッセージ』岩波現代文庫、2009 年、120～121 頁。

うこと以外の、何らの意味もないと確信していた。弟が召集された後、姉は弟からの手紙を受けとっていたから、当然、その行間に多くを読みとることができたはずだろう。軍隊での生活が彼にとってどれほど苛酷であったかは、想像に難くない。しかしその詳細を私が聞くことはなかった。私がある日突然聞いたのは、弟が病気で内地の病院に送還されてきたということ、その後しばらくして、除隊になり、浦和の家に帰ったということであった。彼は出かけるまえに私が出かけたとき、ほとんど変わっていないようにみえた。「とにかく無事でよかった、苦労したろうけれど」と私は感慨をこめていった。「苦労なんてものじゃない、その話はよそう、もう考えたくないのだ」と彼は短く答えた。私はそのとき中国で何がおこったのかを知らなかった。今でも知らないし、それを知る時はおそらく永久に来ないだろう。しかし中国から帰った男は、中国へ行くまえの男ではなかった。そういうことが、はるか後になってから、次第に私にも見えて来るようになった。(197～198 頁、改 223～224 頁)

(1) 「出かけるまえに私が出かけたとき、ほとんど変わっていないようにみえた」友人の変化→「中国から帰った男は、中国へ行くまえの男ではなかった」

- ・もともと物静かで聡明であると同時に、「軍国主義を呪い」、戦争に断固として反対していた友人は、除隊後、「苦労なんてものじゃない、その話はよそう、もう考えたくないのだ」と言い、従軍していた中国でどのような経験をしたのか、決して語ろうとしなかった

・『続 羊の歌』「格物致知」

「いくさの間語り合うことの多かった旧友の一人は、中国の戦線へ行き、病を得て還った。戦後の東京で出会ったときに、「政治の話はもうやめよう」と彼はいった。「ぼくはひっそりと片すみで暮したいよ」「しかし君を片すみからひきだしたのは戦争だね、戦争は政治現象だ」と私はいった。「戦争はもう終わったではないか」「政治現象は、決して終らない」「しかしどうにもならぬことではないか」「たとえどうにもならないことであるとしても」とそのときに私はいった、「ぼくはぼくの生涯に決定的な影響をあたえたいし、またあたえることができるだろう現象を、知りたいし、見きわめたいと思う」。〔……〕「何も知らずに暮しているのが、いちばん幸福だね」と彼は呟き、私は彼を理解していた。いくさの傷手は、私の想像も及ばぬほど深かったにちがいない。それは私の想像も及ばぬ経験があったからだろう。もはやそれ以上ということは何もなかった。」(183～184 頁、改 208～209 頁)

- ・加藤は後年、「戦争に行く前は、普通の人以上に知的活動の活発」だった友人が、戦争から帰ると「環境を理解したい」という意志を喪失していたと述べ、この変化は「戦争中の残酷な経験が彼の人格を破壊した」ことによりもたらされたとする。そして、「私の親友の何人かは、戦争によって物理的に殺された。一人の親友は、物理的ではないけれど精神的に殺された。だから戦争に反対することは、ほとんど論理的必然に近い」と述べる<sup>8</sup>

(2) 「そのとき中国で何がおこったのか」？

<sup>8</sup> 加藤前掲『私にとっての 20 世紀』73～74 頁。

加藤は戦争中、「中国で何がおこったのか」を、「今でも知らないし、それを知る時はおそらく永久に来ないだろう」と述べつつも、最後に「はるか後になってから、次第に私にも見えて来るようになった」と付け加える

### 第 8 段落 戦争に行った友人② —— 中西哲吉

しかし中西は死んでしまった。太平洋のいくさの全体のなかで、私にどうしても承認できないことは、あれほど生きることを願っていた男が殺されたということである。生きることを願っていたのは、むろん中西だけではなかった。しかし中西は私の友人であった。一人の友人の生命にくらべれば、太平洋の島の全部に何の価値があるだろうか。私は油の浮いた南の海を見た。彼の眼が最後に見たでもあろう青い空と太陽を想像した。彼は最後に妹の顔を想いかべたかもしれないし、母親の顔を想いかべたのかもしれない。愛したかもしれない女、やりとげたかもしれない仕事、読んだかもしれない詩句、聞いたかもしれない音楽……彼はまだ生きはじめたばかりで、もっと生きようと願っていたのだ。みずから進んで死地に赴いたのでも、「だまされて」死を択んだのでさえもない。遂に彼をだますことのできなかった権力が、物理的な力で彼を死地に強制したのである。私は中西の死を知ったときに、しばらく茫然としていたが、我にかえると、悲しみではなくて、抑え難い怒りを感じた。太平洋戦争のすべてを許しても、中西の死を私が許すことはないだろうと思う。それはとりかえしのつかない罪であり、罪は償われなければならない。…… (198～199 頁、改 224～225 頁)

#### (1) 「友人」中西の戦死

- ・中西哲吉 (1921～45) は、愛媛県出身で、第一高等学校から東京帝国大学経済学部に進学した。一高時代は『向陵時報』『校友会雑誌』に古典文学論や小説、戯曲、詩歌、社会時評などを寄稿し健筆を振るい、マチネ・ポエティックの結成にも加わった。「論理的な頭脳をもち、真面目で、反軍的な思想の持ち主だった」(山崎剛太郎) という<sup>9</sup>→しかしその後、陸軍の学徒兵として出征し (幹部候補生を志願せず)、1945 年 5 月にフィリピンで戦病死する<sup>10</sup>
- ・加藤は、中西が没した「油の浮いた南の海を見」つめ、「彼の眼が最後に見たでもあろう青い空と太陽」に思いを馳せる。「…かもしれない」という言葉を重ねて、「あれほど生きることを願っていた」、「まだ生きはじめたばかりで、もっと生きようと願っていた」友人が、死ぬ間に思ったであろうことを、自身と重ね合わせながら想像する

#### (2) 「太平洋戦争のすべてを許しても、中西の死を私が許すことはないだろう」

- ・「一人の友人の生命にくらべれば、太平洋の島の全部に何の価値があるだろうか」→かけがえのない一人の友人を、物理的な力で強制的に死地に追い込んだ、「いくさ」と国家権力へ

<sup>9</sup> 鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか——『羊の歌』を読みなおす』岩波書店、2018 年、181～182 頁。

<sup>10</sup> 「NOTES」『マチネ・ポエティック詩集』思潮社、1981 年、初出 1947 年、165 頁。

の「抑え難い怒り」=加藤の愛する身近な「小さな存在」(第 1 段落)が、「いくさ」によって蹂躪されることに対する、激しい怒り

- ・加藤「怒る事の大切さまたは『金芝河詩集』の事」(1975)

「人は不正に対してのみ怒るのである。」「怒る人が必ずしも反戦の行動に出るとはかぎらない。しかし怒らなければ、反戦の行動に出ることはない。その怒りは自発的な感情である。」「思うに、特定の状況に対して怒ることのできる能力は、人間の能力のなかでも大切なものの一つであろう。老いてその感情の衰えないことを、私は願う。」<sup>11</sup>

### 第 9～10 段落 加藤にとっての中西哲吉

しかしその後時が経つにつれて、私にはもう一つの考えも、しきりにつきまとう様になった。それは、私が生きのこり、中西が死んだということに、何らの正当な理由もありえないという考えである。彼の家に集り、「ドゥイノの悲歌」を読んでいたときに、私たちは、同じものを愛し、同じものを憎んでいた。同じ事を理解し、同じ事を軽蔑していた。同じように世間を知らず、また世間を知らないということを知っていた。人生は無制限にながく、従って将来何をするかということ、さしあたって決める必要はないと考えていた。ただ生きる必要を内側に感じていたので、生きることを願っていた。もしその願いの無残にも断ち切られることがなかったら……と、私はその後しばしば考えるようになった。もし九死に一生を得て、彼が還っていたら、彼自身を死地に追いこんだものに対して、中西はどういう態度をとったであろうか。私ではなくて彼が生きのびていたら、彼は何をするかを願ったであろうか。「天に代りて不義を打つ」という言葉は、無意味にちがいない。第一に、天の意志は知ることができない。第二に、たとえ知ることができても、天を代表する資格は誰にもない。しかし友人の切望は察することができるかもしれないし、代ってそれを実行する資格——はないかもしれないが、漠然としてしかし激しい誘いはあり得るだろう。私はその後、みずから退いて、羊のようにおとなしい沈黙をまもろうと考えたときに、実にしばしば中西を思い出したのである。

高等学校の学生であった頃、中西は一文を草して時勢を諷したことがある。私はそれを学生新聞に掲載しようとした。校正刷を見た文芸部長は、私をよびつけて、しかじかの「不穏な箇所」を削除するように、と行った、「こんなものを出したら、憲兵が来ますよ、私には責任がもてない」。それは「不穏当」ではなく、誰でも考えていることを、遠まわしにいったにすぎない、と私は説明した。しかし文芸部長は、「憲兵」をくりかえして譲らず、中西は削除に応じなかった。新聞を発行するためには、文章の全体をひっこめる他はなかった。しかしその次の号の新聞には、中西の別の文章があらわれた。その署名は、中西ではなくて、「空又覚造」というのであった。(199～200 頁、改 225～226 頁)

- (1) 「私が生きのこり、中西が死んだということに、何らの正当な理由もありえない」

<sup>11</sup> 加藤周一「怒る事の大切さまたは『金芝河詩集』の事」『加藤周一著作集 15 上野毛雑文』平凡社、1979 年、151～152 頁。

- ・第 8 段落では加藤が中西の戦死を知った直後の感情が描かれ、第 9 段落ではその後も中西の死を問い返すなかで、頻りにつきまとうようになった「もう一つの考え」が述べられる→同じように「生きることを願っていた」加藤と中西のうち、一方が生き残り、一方が死んだことに、「何らの正当な理由もありえない」→「もし九死に一生を得て、彼が還っていたら」、もし「私ではなくて彼が生きのびていたら」、彼は何をするだろうか。「友人の切望は察することができるかもしれないし、代ってそれを実行する資格」はあるかもしれない

- ・加藤『私にとって 20 世紀』（2000）

「学校の同級生や友人はかなり大勢死んでいる。自分はやっと生き延びたけれど、別に理由があって生き延びたわけではなくて偶然です。なんの理由もなく、私の友人は戦争のために死んでしまった。／私の友達を殺す理由、殺しを正当化するような理由をそう簡単に見つけることはできない。だから、戦争反対ということになるのです。／死んだ友達がもし生きていたら、いまいわないだろうことをいったり、いうに違いないことを黙っていたりするの、少なくとも私がしゃべることが可能であるかぎりにおいては、こだわりなしにはできません。要するに彼が決していわなかったであろうことをいったり、彼が黙っていなかったらうことを沈黙したりということは、したくないという気持ちが私の中にある。／たとえば、戦争を肯定することはその一つです。殺された人たちからいえば、そういうことは許せないだろうと思います。もし、私がそういうことをしゃべれば、それは友達に対する一種の裏切りのような気がするのです。」「私の善し悪しの判断の一つは、裏切りということです。友達を裏切ることはしたくない。」<sup>12</sup>

(2) 「いくさ」の犠牲となった二人の友人

二人の友人は、共に反軍国主義であったにもかかわらず、戦争によって、一人は精神的に殺され（第 7 段落）→もう一人は物理的に殺された（第 8～9 段落）→二人の友人が「いくさ」によって、どのような状況に追い込まれたかが二項対照的に描かれ、加藤が戦争に一貫して反対する根拠が提示される。1960 年代後半の加藤のヴェトナム反戦という主張を支える根源を、ここで改めて表明しているのではないか

(3) 「空又覚造」という署名入りの文章は、学生新聞に掲載されたのか？

- ・長谷川泉『嗚呼玉杯——わが一高の青春』（1989）には、「高校生離れをした剛腕のライターが二人いた。一人は東村勝人、一人は中西哲吉である」と述べられている。中西は、思想的にラディカルであり、中西作というだけで事前検閲を通りそうになかったため、『校友会雑誌』には様々な筆名を用いて作品が掲載された<sup>13</sup>
- ・当時の文芸部長は、保守的な思想を持つ沼澤龍雄教授。加藤が編集委員を務めた期間の『校

---

<sup>12</sup> 加藤前掲『私にとっての 20 世紀』10～11 頁。

<sup>13</sup> 長谷川泉『嗚呼玉杯——わが一高の青春』至文堂、1989 年、125～126 頁。

友会雑誌』、あるいは『向陵時報』にも「空又覚造」という署名入りの文章は見つからない。

「空又覚造」について中村眞一郎や山崎剛太郎は言及しているが、長谷川泉は何も触れていない。「掲載を認められなくとも削除の求めには応じずに、新たな別の作品を書いた中西を「空又覚造」という綽名で呼んだか、「空又覚造」という筆名を使おうという話が、マチネ・ポエティックの同人となる人たちのあいだで出ていたのだろう。しかし、実際には使われなかったのではなかろうか」<sup>14</sup>

---

<sup>14</sup> 鷲巣前掲『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』183～186 頁。